

## 《巻頭言》

# 福島の再生のために

編集委員長 人間・心理学系長

渡 辺 隆

人は失われたときにはじめてその大事さに気付くものである。家族、友人、職業、健康、財産、信頼、権威そして故郷。震災によって福島で生きる者が失ったものは余りにも大きいのが、気付かされたことは福島がどんなにすばらしい所だったかである。自然の豊かさや人間性ばかりでなく、差別や偏見から最も遠いところに福島はあった。まさに幸福の楽園 (happy island) そのものであった。

2011年3月11日、この日を境に福島大学の教員は大きく進路を変えられることとなった。震災後直ちに学生と安否確認の連絡が一人も漏らすことなく驚くべき短時間で行なわれ、避難所が開設された。東京電力福島第一原子力発電所の事故が起きると、遠方に避難する学生のためのバスがチャーターされた。留学生の多くも極めて短期間に帰国することができた。

我々教員は震災直後より各自の専門性を生かした多様な活動を開始した。同時に我々がなすべき使命、果たすべき役割などについての検討や議論が重ねられた。そして安全性が確認されると、大学に戻ってきた学生が活動に加わり組織的な活動に発展していった。多くの職員がボランティアとして参加した。これらの活動はおそらく生涯通じて続けられることになるのだろう。

本学では「地域貢献活動」が重要な社会的使命と考えられており、教員は研究で得られた知見や技能を地域に役立てるための活動を日常的に実践している。この実践活動そのものを研究テーマとしている教員も多く、小職もその一人である。日頃より培われた様々な経験やネットワークが今回の活動に大きく役立った。さらに活動を通して新たなつながりが生まれ、有益な交流や貴重な体験が広げられていった。

本報告書は今年度行われたこのような実践活動のごく一部を研究という視点から紹介するものである。したがって、本報告は研究実績を学術的観点から述べるというより、それぞれの教員の専門性を生かした実践的地域支援活動を紹介する性格が強い。

解決すべき課題を考えれば、我々の活動は予算も組織もささやかなものである。しかし、地元の大学として我々にしか成し得ない役割を自覚し、息の長い活動を続けていく所存である。福島の再生のためによろこんで全力をささげるつもりである。その覚悟においては、当然だが他の誰にも負けないと自負している。もし我々の知識や経験が少しでも役立てられることがあったら、いつでも声をかけて欲しい。本報告書がその手がかりとなることを切に願っている。今ここで、精一杯活動することが将来きっと多くの分野で役立つだろう。もちろん二度と事故が起こらないようにするために。

全国のみなさま、海外のみなさまより本学と福島に言葉では表せないほどたくさんのご支援と励ましをいただきました。県民の一人としてこころより感謝いたします。  
ありがとうございました。

再生した福島でみなさまとお会いすることを楽しみにしています。

それはそれほど遠くないように思います。